

一 歴史故事上の女性

「長信宮」[800]中華書局『全唐詩』の頁数

月皎昭陽殿、霜清長信宮 月は皎たり昭陽殿、霜は清し長信宮

天行乘玉輦、飛燕與君同 天行 玉輦に乘じ、飛燕 君と同じ

別有歡娛處、承恩樂未窮 別に歡娛の処有り、恩を承けて樂しみ未だ窮まらず

誰憐团扇妾、独坐怨秋風 誰か憐れむ团扇の妾、独坐 秋風を怨むを

昭陽殿に月は皎皎と照り、長信宮に霜は清くひんやりとしている。天子の行幸に際して玉輦に乘られるが、趙飛燕は君と同じ輦に乗っている。

君は別に樂しまれる処があつて、その恩愛を承ける喜びは窮まることになかった。(それにひきかえ)この身は秋の团扇と同じように棄てられ、いま独り長信宮にいて秋風が吹くのを悲しんでいる。

○『樂府詩集』卷四三は詩題を「長門怨」とする。

※『漢書』卷九七「班婕妤傳」の、班婕妤が帝の輦に乘らなかつた故事を趙飛燕が乘つたことにアレンジ。

『玉台新詠』卷一「怨詩」の「团扇扇」の二つを典故に組み入れたところに新しさがあるか。

※王琦、安旗、瞿蛻園・朱金城等、寄託の意有りとする。

「長門怨二首」其一 1880

天迴北斗挂西樓 天は北斗を廻らして西樓に挂く

金屋無人螢火流 金屋人無く螢火流る

月光欲到長門殿 月光到らんと欲す長門殿

別作深宮一段愁 別に作す深宮一段の愁い

天は北斗をめぐらして西樓にかかり、夜も次第にふけた。皇后は阿嬌を蔵すといつた彼の金屋から逐い出されたために、ここには人もおらず、ただ二三の流螢が飛ぶのみである。やがて月は影を移して、皇后の退居する長門殿に至ろうとし、皇后は深宮の中に在つてさらに一段の愁いを添えられることだろう。

○長門怨―『樂府解題』『樂府詩集』卷四三に言う。「長門怨なる者は、陳皇后の為に作るなり。(皇)后長門宮に退去して、愁悶悲思す、司馬相如の文章に工みなるを聞き、黄金百斤を奉じて、愁いを解くの辞を為らしむ。相如為に長門賦を作る。帝見て之れを傷、復た親幸するを得。後人其の賦に因りて「長門怨」を為るなり」。

其二

桂殿長愁不記春 桂殿長く愁えて春を記せず

黃金四屋起秋塵 黃金四屋 秋塵を起す

夜懸明鏡青天上 夜明鏡を懸く 青天の上

独照長門宮裏人 独り照らす長門宮裏の人

桂殿の中に閉じこもつていて、春が来ても少しも知らない。金箔を塗った四壁にもいつしか秋塵を散じた。夜になれば、月が皎皎として高くさし上り、さながら明鏡を青天の上にかけたよう、心ありげに長門宮にいる陳皇后を照らす。

※蕭士贇「二詩、漢武陳皇后の事を櫟括し、以つて玄宗王皇后に比す、その意微にして婉なり」。安旗「太白の此の篇或いは自況の意有り」。

二、征夫の妻

「子夜呉歌」秋歌 1711

長安一片月、万戸擣衣声 長安一片の月、万戸衣を擣つおとの声

秋風吹不尽、綵是玉関情 秋風吹きて尽きず、綵なて是れ玉関すくの情

何日平胡虜、良人罷遠征 何なんの日か胡虜を平らげて、良人は遠征を罷やめん

長安の夜空に冴える一片の月、全ての家から響いてくるきぬたを打つ音。秋風は吹き続けてやまない。月、きぬた、秋風、すべて玉門関のあなたを思わせるものばかり。ああ、いつになったらえびすを平らげて、あなたは遠い戦地から帰ってくる。

※久保「当時、辺塞に兵を用ふることを諷したものと見える」。

「長相思」其二 1713

日色已尽花含煙 日色すて已に尽きて花煙はなえんを含む

月明欲素愁不眠 月明 素そならんと欲して愁おもいて眠らず

趙瑟初停鳳凰柱 趙瑟ちやうし初めて停とどむ鳳凰の柱

蜀琴欲奏鴛鴦弦 蜀琴しやくきん奏せんと欲す鴛鴦の弦

此曲有意無人傳 此の曲 意い有れども人の伝つたうる無し

願隨春風寄燕然 願ねがわくは春風に隨したがって燕然に寄よせん

憶君迢迢隔青天 君を憶おもえば迢迢てうてうとして青天を隔へつ

昔日横波目 昔日おつは横波の目

今成流淚泉 今いまは流淚りゅうらいの泉と成なる

不信妾腸斷 妾しよの腸斷ちやうたつつを信しんぜざれば

归来看取明鏡前 归来かへりして看取みせよ明鏡の前

夕陽の陰はすでに薄らぎ、花は煙を含んでほの暗く、夜になって月が白く冴えわたる頃になったが、まだ眠りつかない。愁いを除くために趙瑟や蜀琴を取って情を寄せようと思うが、趙瑟には鳳凰の柱がかかっているし蜀琴には鴛鴦の弦があり、ますます思いを深くする。

この曲には鳳凰や鴛鴦と同じ私の思いがこもっているのだけれど、誰もこの思いを伝えてくれない。願わくは春風に乗って突厥の燕然山にこの思いを寄せたい。こうしてあなたを思っても、あなたははるかかなた青天を隔てた遠いところに征伐に行き、いつ帰るのかわからない。

昔、あなたに流し目をしたその目が、今は涙を流す泉になってしまった。私の腸が断たれているのを信じられないなら、お帰りになったとき、この鏡の涙の痕をくらんくたさぐ。

○『樂府詩集』卷六九。雜曲歌辭。

※蕭士贇「これまた成婦の詞なり、詞意、悲しんで傷らず、怨んで誹らず、国風の体を得たりと謂うべし」。

「春怨」1880

白馬金羈遼海東 白馬金羈 遼海の東  
 羅帷繡被臥春風 羅帷繡被 春風に臥す  
 落月低軒窺燭尽 落月 軒に低れて燭の尽くるを窺う  
 飛花入戸笑床空 飛花 戸に入りて床の空しきを笑う

夫は白馬に跨り黄金の手綱を握り、武者ぶり雄々しくはるかに遼海の東に征伐に出かけ、妾は羅帷の中に繡被を擁して、春風のうちに臥している。

夜が更けると、落月が軒端に低れて燭が尽きるのを窺うように、昼が静かな時、飛ぶ花が戸に乱れ入って、空床に人がいないのを笑うように、見るものすべて、妾に対して意思があるようで、いよいよ感慨にたえない。

○春怨―先行する作として『玉台新詠』卷六王僧孺「春怨」がある。王僧孺の作も、「万里音書断え、十載棲宿を異にす。……君去りて檢閣に在り、妾留まりて函谷に住す」と夫は万里彼方の辺境にあり、女は「幾たびか過ぎて風霜を度る、猶お能く斃独を保つ」と、何年もつらい年月を過ごし、独りの暮らしを守っている。※王昌齡にも「春怨」「西宮春怨」があるが、王僧孺の作が征夫の妻の「怨」であるのが、李白の作に近い。

※『玉台新詠』の「春怨」や、曹植の「白馬篇」等、先行する作品の構想や表現を取り入れて「春怨」の世界を成熟させている。

※閨情への関心と安史の乱の時期↓征婦怨

三、宮女の閨怨

「邯鄲才人嫁為厮養卒婦」1704

妾本崇台女、揚蛾入丹闕 妾は本と崇台の女、蛾を揚げて丹闕に入る  
 自倚顔如花、寧知有凋歇 自ら倚る顔花の如きに、寧る凋歇有るを知らんや  
 一辞玉階下、去若朝雲没 一たび辞す玉階の下、去りて朝雲の没するが若し

毎憶邯鄲城、深宮夢秋月 毎に憶う邯鄲城、深宮に秋月を夢む

君王不可見、惆悵至明發 君王見る可からず、惆悵 明發に至る

私はもと崇台の女、蛾眉を揚げて深宮に奉仕することになった。花のような顔を頼りにして、なかなか衰えることはないと思っていた。

ひとたび玉階にお暇して、里方にもどると朝雲が風に吹き散らされたようなもの。いつも思う 邯鄲城の宮中に在った時のこと、深宮で秋の月を賞したことを夢に見る。君王には再びお目にかかることができず、悲しみ極まってあくる朝に至るので

○「邯鄲才人嫁為厮養卒婦」―謝朓にこの題の詩有り。『玉台新詠』卷四に載る。「生平宮闈の里、出入丹墀に待す。箭を開きて羅敷を方べ、鏡を窺いて蛾眉を比す。初め別れしより意未だ解けず、去ること久しくして日に悲しみを生ず。憔悴自ら識らず、嬌羞故姿を余す。夢中忽ち仿佛として、猶お言う冥私を承くと（ふだん宮殿の中にいて、出入りには赤い色の庭にはべる。同輩たちと箏笛を開いて薄絹の服地を比べたり、鏡をのぞいて器量を比べたり。宮中を別れ去った時からの心の結ばれは解けず、時が経つにつれて日に日に悲しみは増す。気づかないうちにすっかりやつれたが、それでも恥じらいの中に元の姿をしのばせる。夢の中でふと昔のさまが現れて、「宴席で目をかけられた」などと口走る。）」。

※謝朓も李白も、宮中に在った時を懐う女を描く。謝朓に比べると女の美しさとプライドが強調されている。

「秦女卷衣」1704

天子居未央、妾侍卷衣裳 天子は未央に居り、妾侍りて衣裳を巻く  
 顧無紫宮寵、敢拂黃金床 顧るに紫宮の寵無し、敢て黄金の牀を払わんや  
 水至亦不去、熊來尚可當 水至れども亦た去らず、熊來たるも尚お当たるべし  
 微身奉日月、飄若螢之光 微身 日月を捧げ、飄として螢の光の若し

願君采葑菲、無以下體妨 願わくば君葑菲を采れ、下体を以て妨ぐる無かれ

天子は未央宮の別殿におられるので、私はお側のご用を引き受けて、お寝になられる時には、お衣裳を畳んでかたづけ、けれどこれまでに深宮で特別の恩寵を得たのでもないから、黄金の床を払って枕席に侍ることはない。

私はもとより君のためにはこの身を惜しまない、むかし楚の昭王の夫人が使者の符信を持参しなかったので水が襲ってきてもその場を動かさず溺死した信義を持っているし、馮婕妤が、熊が檻から飛び出した時、身をもって聖躬をかばったように、天子のおん為ばかりを思っている。はかないこの身でもって天子にお仕えするのは、螢火の光が日月に對するようなもの。願わくは、『詩經』に、かぶらも大根を采るのに根かぶばかりを大切にするのはやめましょうというように、我が君が、私の誠の心を汲んでお目をかけてくださいますように。

○秦女卷衣—吳均に「秦王卷衣」詩がある。『樂府詩集』卷七三、吳均「秦王卷衣」の題下に「樂府解題』に曰く、「秦王卷衣」は、咸陽の春景及宮闈の美を言う。秦王衣を卷き、以て飲ぶ所に贈るなり」。唐・李白に「秦女卷衣」有り。王琦「辭旨各々殊なる、未だ本づく所を詳らかにせず」。

※この宮女は特定の誰かではない。天子の寵愛を承けることを願ひ、天子に忠勤しているのだが、愛される可能性が極めて少ない切ない思いを詠じている。その自らの忠義を語るのに、『列女伝』の楚の昭王の夫人・『漢書』の馮婕妤（後の信都太后）を引きあいにし、『詩經』邶風「谷風」の棄てられた女の思いに自らの思いを託している。忠義貞節の女の複数の系譜を合わせて作りあげたものである。女の切ない思いとともに、高いプライドが伝わってくる。

※寄託の作だろう。この女は李白自身。安旗「本篇は則ち秦女を以て自らに喩え、忠款の情を輸す」。

#### 四、妓女

「擬古十二首」其一 1692

高樓入青天、下有白玉堂 明月看欲墮、當窗懸清光 遙夜一美人、羅衣霑秋霜 含情弄柔瑟、彈作陌上桑 弦聲何激烈、風捲遶飛梁 行人皆躑躅、栖鳥起迴翔 但写妾意苦、莫辞此曲傷 願逢同心者、飛作紫鴛鴦	高樓 青天に入る、下に白玉の堂有り 明月看て墮ちんと欲す、窓に当たりて清光を懸く 遙夜一美人、羅衣 秋霜に霑う 情を含みて柔瑟を弄す、彈じて陌上桑を作す 弦聲何ぞ激烈なる、風捲きて飛梁を遶る 行人皆な躑躅、栖鳥起ちて迴翔す 但だ写す妾が意の苦なるを、辞する莫れ此の曲の傷むを 願わくは同心の者に逢い、飛びて紫鴛鴦と作らん
--	---

高樓は青天に届くほどで、その下に白玉堂がある。秋の夜半明月はみるみる西に落ちようとし、堂の窓にあたって清い光を投げかけている。この夜長に美人が薄絹の衣で秋の霜に潤いつつ、瑟で陌上桑の一曲を弾き始めた。

その曲は激烈であり風に巻かれて高い梁をめぐり、余韻嫋嫋とこしえに尽きない。道行く人も歩みをとどめて、ねぐらに住む鳥も再びさつて飛ぶ。この絃は私の苦しさを写したからで、曲が悲しみに満ちるのは許してください。願わくは、同じ心の人に逢い、紫の鴛鴦となって翼を並べて飛びたい。

※男と会えない理由は分からない。女の身分、不分明。妓女っぽい。  
※蕭士贇「此の詩は喩う、賢者才を懷き芸を抱き、以て人の耳目を聳動する有り、而も背て身を以て軽しく人に許さず、同心同徳の者を得て、之れに依附せんことを思ふなり」。

#### 五、商人の妻

「長干行二首」1694(挙例を略す)

○『楽府詩集』雜曲歌辭の類に入れられている。「行」は、うた。長干は今の南京中華門外の秦淮河の南にある。出稼ぎの商人たちの居住した町らしい。

※コメント… 行商人の妻の悲哀を詠じる。宮女でも、征夫の妻でもない、この設定は、六朝の民歌（呉歌・西曲）に由来するだろう。

※コメント… 作者について論有り（『唐詩紀事』と黄山谷）。

六、その他（民歌の艶情を継承・発展させた作品

「巴女詞」1086

巴水急如箭、巴船去若飛 巴水急なること箭の如く、巴船去りて飛ぶが若し  
十月三千里、郎行幾歲帰 十月三千里、郎行きて幾歳か帰る

長江の上流の巴水は、流れ急なること箭のようで、ここを下っていく巴船は飛ぶがごとくである。今しも、十月の頃、わが郎は三千里を下って、はるかに呉楚の地に赴いたが、何年たったら帰って来るのだろう。

※『楽府詩集』卷四九「西曲歌下」に「歛が揚州に下ると聞き、相い送る江津の湾。願わくは篙と櫓の折れ、

郎をして到頭くわいに還ら交めん」。船頭である男が早く帰ってきますようにとの思いを詠じている。

「采蓮曲」1083

若耶谿傍採蓮女 若耶谿じやくやいほう傍 採蓮の女

笑隔荷花共人語 笑いて荷花を隔て人と共に語る  
日照新妝水底明 日は新妝を照らして水底に明かに  
風飄香袂空中舉 風は香袂を飄して空中に挙がる

岸上誰家遊冶郎 岸上誰が家の遊冶郎ゆやろうぞ

三三五五映垂楊 三三五五 垂楊に映ず  
紫騮嘶入落花去 紫騮嘶きて落花に入りて去る  
見此脚躡空斷腸 此れを見て脚躡空しく断腸す

蓮の名所として知られる若耶溪の傍らには、わかい女が集まって蓮の花を採っているが、めいめい蓮葉の陰の深い処にいて、花を隔てて話をしている。やわらかな日の光が新しい化粧を照らし、その影がはつきり水に映り、風が吹いて来ると、女の袂をひるがえして空中に挙げる。

岸の上には遊び人の男たちが三々五々群をなして柳の間にいる。やがて馬が嘶いて落花の間に入って去るとき、采蓮の女を垣間見て心を悩まし立ち去りがたい風情である。

「越女詞五首」其一 1085

長干呉兒女、眉目豔星月 長干の呉兒女、眉目星月より豔なり  
屐上足如霜、不著鴉頭襪 屐上足霜の如く、不著鴉頭の襪を著けず

長干の里に住む娘たちは、みな美しくその容貌は星月のきらめきよりもあでやか。下駄を履いた脚は、霜のように白く透きとおりに、鴉頭の靴下などははかない。

○越女詞「胡震亨『李詩通』の題下の自註に「越中にて見る所を書するなり」。越の娘の風俗を写したものだ。越は浙江省一帯の地。枚乘「七発」に「越女は前に侍り、齊姫は後に奉う」、その五臣注に「齊越二国は、美人の出ずる所」。

其二

呉兒多白皙、好為蕩舟劇 呉兒白皙多く、好みて蕩舟の劇を為す  
売眼擲春心、折花調行客 眼を売りて春心を擲ち、花を折りて行客に調す

呉の娘は色の白い子が多い、舟を揺さぶって戯れている。陸に上がってくると流し目で人を見て春心を投げ贈り、花を折って道行く人をはからかたりしている。

其四

東陽素足女、会稽素舸郎 東陽素足の女、会稽素舸の郎  
相看月未墮、白地断肝腸 相い見て月未だ墮ちず、白地 肝腸を断つ  
東陽の生まれだという素足の女と、会稽から白い舟に乗って来たわかもと、残月のもとに見つめあっているが、あつという  
まに肝腸を断つ別れ。  
※李白、脚の白さにはこだわりあり。

「夜坐吟」1088

冬夜夜寒覺夜長 冬夜夜寒く夜の長きを覺ゆ

沈吟久坐坐北堂 沈吟して久しく坐り北堂に坐る

冰合井泉月入闌 氷は井泉を合せて月は闌に入り、

金缸青凝照悲啼 金缸は青く凝って悲啼を照らす。

金缸滅、啼轉多 金缸滅し、啼くこと転た多し

掩妾淚、聽君歌 妾が涙を掩い、君が歌を聴く

歌有声、妾有情 歌に声有り、妾に情有り。

情声合、兩無違 情と声とは合し、兩つながら違う無し

一語不入意、從君万曲梁塵飛 一語意に入らざれば、君が万曲に梁塵の飛ぶに従せ

冬の夜、夜は寒く、夜の長さをひとしお感ずる。考えこんでじっと「主婦の部屋である」北堂に坐りこむ。井戸水は凍り、月の光が寢室にさしこむ。黄金の油皿の灯は青い炎となつて凝り、泣き悲しむ私を照らす。

やがて油皿の灯は消え、泣き声はますます激しくなる。私の涙をおおい隠して、あなたの歌を聴きましよう。あなたは歌がお上手。でも私には情がある。私の思いとあなたの歌とがびったりあつて、ふたつがくいちがいませんように。もし一語でも気に入らなければ、あなたの歌うたくさんの曲にうつばりの塵さえ感動で飛ぶとしても、私とは関係のないことです。

○「夜坐吟」は、齊・鮑照が初めて作った。『樂府詩集』卷七六に以下の作が載る。「冬夜沈沈夜坐吟、含情未發已知心。知入幕。風土林。朱灯滅。朱顏尋。体君歌。逐君音。不貴声。貴意深」。

※寒さのために水は凍り、炎さえも青く凝る厳しい冬の静寂の中で、女の悲しみは深く鋭い。夫と心が一つになることを願いはするが、女の心は氷のようにとがる。

※李白自身の不遇に基づく切実な思いを闡怨に託したものと考えるのが自然ではないだろうか。安旗「詩旨は陳沈の説『詩比興箋』に「君臣の際、惟だ志同じくして而して後に道合するに喩つ」に従う可し、則ち詩の作れるは当に待詔翰林後期に在るべし、其の時太白己に玄宗の志同じからず道合わざるを感慨す」。